2025年5月11日 川越教会

丸山 勉

忍耐強い愛によって

［ガラテヤの信徒への手紙2章19～3章6節］

わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。あなたがたは、それほど物分かりが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。無駄であったはずはないでしょうに……。あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか。それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです。

[1] 伝道開始57周年を迎えて―「信仰義認」を伝える教会

今日は、川越キリスト教会・伝道開始57周年を記念しながら礼拝を捧げています。私たち、川越教会への導かれ方は皆それぞれですが、今ここでご一緒に主を礼拝出来ていることは、私たちの思いを超えたくすしき恵みで、とても幸いなことだなぁと思います。そして「伝送開始57周年」という訳ですが、一体何を「伝道」し始めたかと言えば、主の十字架の福音ですよね。パウロが本日の箇所のガラテヤ書で語る「信仰義認」という神様の贈り物をいつも変わらずに伝道するのが教会です。

キリスト教信仰というのは、一般的には少し理解しづらい所があるかも知れないなと改めて思いました。キリスト教の救いと言うのは、ただ一方的な恵みによるもので、行いとか修練ではなく、「信じる」という一点なんだと言われますね。ガラテヤの信徒への手紙の2：16でもパウロはこう言いました。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」。これがよく「信仰義認」と言われる部分の一つです。このことは私たちは既に当たり前のように思っている所があるかも知れませんけれど、これは、普通の人間の理解を超えたことなんだと思うのです。私たち皆、ある意味、努力して生きていますよね。信仰の道を追求することだって、神様に近づこうとする時には、それなりの覚悟や修練がなければ、それは良くないのではないか、また、手ごたえがないではないと人は思うのが普通かもしれません。でも例えば、断食したり、山に籠ったり、巡礼したりするということもあっても、それは、信仰を持った者がそういうことをすることがあったとしても、それは「救い」のための条件ではないということです。それで神様に「義」とされる、「救われる」訳ではありませんよね。

ところで、この手紙を書いているのは、パウロです。彼はもともと旧約聖書の律法を遵守することこそが神に受け入れられることだということをひたすら信じて、真面目にそのように生きて来た人です。彼にとって生きることは、律法を守ることでした。旧約聖書の律法の数々と言うのは、「十戒」に代表されますが、それは「神様からの言葉」ですよね。神様は人間を愛して、そしてご自分と愛の関係を生きるために律法を与えたのですが、人間はそれを、人を分け隔てする道具にすり替えてしまいました。律法を守る者は救われ、律法を守らない人間は、神を知らない異邦人同様、神の祝福の外に置かれると言うように、「律法」が独り歩きし、そのようにして他者を裁き、裁くことによって自らを確保することに陥ってしまっていたと言えると思います。パウロもまた、そのような律法学者の急先鋒のような存在でした。そのパウロが、自分はイエス・キリストと出会って、全く変えられたその体験が、使徒言行録などには詳しく記されています。

[2] 「キリストと共に」死に、生きる

かつてのパウロからしてみたら、神様の救いというものはユダヤ人だけのものであったのです。つまり、割礼も受け、律法に忠実な者だけが神に受け入れられるのだと。しかし彼は、初期クリスチャンたちを迫害するダマスコへの道の途上で、突然光に打たれて盲目にさせられ、三日間何も見えなくなったのですが、その中で彼は祈ったのですね。その中で彼が見えてきたことがあった。それはまず、自分がとんでもない罪人だということです。自分は信仰熱心だと思っていたけれども、そこには愛の片鱗もなかった。律法というのは、本来、神様への愛と、人々への愛を生きることを求めるものです。しかし、彼がやっていたことは徹底的に人を裁くことでした。クリスチャンたちを神を冒涜する輩だ、と次々に獄屋に放り込みました。彼は後にローマの信徒への手紙でこう語っています。7:14～15です。「わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」―自己分裂を抱えている自分の真相。律法をひたすら守ることでは、ただ罪の自覚が増えていくのみで、自分の信仰心では自分が救えないということが分かったのです。

ガラテヤ書に戻りますが、パウロは2:19でこのようなことを言っています。「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。」 私パウロは「死んだ」のだと言うのですね。律法が私にもたらしたのは、私の罪であり、その独善が主を十字架に追いやったのだ。そして、あの主の十字架というのは、私の死に場所でもあったのだ、私はキリストと共につけられた。それはこの私を神は真に裁き、抹殺したのだ、ということです。なぜ神が私を抹殺したのか。それは、私が本当の意味で「神に対して生きるため」だと言うのですね。ここに神様の霊の不思議があります。確かに神様は、私たち罪人を裁くのです。容赦ないのです。「わたしは十字架につけられています」と。でも、ここでパウロはこう言いました。‟キリストと共に”十字架につけられたのだと。独りじゃないのです！ですから次の2:20の言葉は、単なる考え方ではなくて、リアルなこととしてパウロは語っているのだと思います。―「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」―これ、凄いですよね。あり得ない事が起こっているということです。抹殺された私なんだけれども、‟主と共に”死んだのだから、その同じ主のよみがえりの力の中で、この私の命はキリストが内に住んでいる命として生きている。‟わたしが今、肉体を持って生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子イエスを信じる信仰によるものです“と、言ってみれば、もうこの私のいのちは、復活の主のいのちに覆われてしまっているのだ、と言っているのだと思います。

[3] 私たちのために最後まで耐え忍んでいるお方がいる。

これはパウロ個人のことに留まりません。むしろ、この私パウロに起こったことは、あなた方皆に起こっていることなんだ、分かってほしい！とパウロは3章の初めの所で言っています。―「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。」この言葉の意味は、よく言われるように、‟目の前に、イエス・キリストが十字架につけられたままの姿で示されているのに”と、過去の話じゃないですよ、と言う意味があるようです。でも本当にそうですよね。信仰というのは、いつも「今」です。私たちはすぐに信仰が形骸化してしまうのです。私自身、本当にそれを思います。何年前、何十年前にバプテスマを受けたからもう安心？いいえ！御言葉に聴かないと信仰は錆びつきます。目線が自分だけになって、人を裁いたり、また自分自身も裁いてしまったりします。そして、神様に祈ることをやめてしまうと、信仰の呼吸は止まってしまうと思うのです。

私はこのガラテヤ書3:1の ‟十字架につけられたままのキリスト”ということにこんなことを思いました。主は、私たちのためにずっと痛み続けている、ということではないかと。すぐにとても申し訳ない気持ちになりました。でも、でもです。主が私たちの所に来て下さったというのは、私たちのために「最後まで耐え忍ぶ」ためなのではないでしょうか？主は、もうスッキリして「あとは待っているよ」と言うのではなく、例えば私たちが血を流すような状況になっていたら、共に血を流し、苦しんで下さっているのだと思います。私たちがどん底を経験していたら、一緒にどん底で頭を抱えて下さっていると思います。主は、あのパウロと一体化したように、罪人の「友」となって下さる。そして、主の愛は、強要しない愛です。むしろご自分が痛むことを選ぶ愛。十字架で示される愛は、静かな愛です。そして、だからこそとても強い愛なのだと思います。やはりパウロが記したコリントの信徒への手紙一の13章の言葉を思いこさずにはいられません。「愛は、忍耐強い。愛は高ぶらない。愛は自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。全てを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」。…私たちは、誰もが皆、この主の愛の中に置かれているのですね。

この愛を、これからもお伝えしてゆきましょう。私たち自身と、また私たちの交わりを通して。この愛を必要としない人は、世界のどこにもいないのですから。お祈り致します。

神様、今日ご一緒に礼拝を捧げることが出来ていること、これ自体大きなあなたの奇跡です。感謝致します！あなたは、私たちがあなたから離れないように、あなたの方から十字架という出来義とを通して、私たちを包み込んで下さいました。わたしがどんなに傲慢で、自己中心な者でも、あなたは、ずっと忍耐して下さり、あなたは私の友だと、聖霊の証印を与えて下さいました。今私たちが生きているのは、あなたと共に生きているという驚くべき事実に、絶えず新しく目を開かせて下さい。私たちの教会がこれからもあなたを伝え、あなたを喜ぶ教会として進ませて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。